電子書籍
万葉集

目次

左記の章題をクリック又はタップすると各歌に移動します。

大和には群山あれど〈巻一・二〉 舒明天皇の国見の歌
熟田津に船乗りせむと月待てば〈巻一・八〉 額田王
わたつみの豊旗雲に入日さし〈巻一・一五〉 中大兄皇子
冬ごもり春さり来れば〈巻一・一六〉 額田王
あかねさす紫野行き標野行き〈巻一・二〇〉 額田王
紫草のにほへる妹を憎くあらば〈巻一・二一〉 大海人皇子
打麻を麻績王 白水郎なれや〈巻一・二三〉 麻績王を哀み傷みて人の作れる歌
うつせみの命を惜しみ〈巻一・二四〉 麻績王の返歌
春過ぎて夏来るらし〈巻一・二八〉 持統天皇
玉襷 畝傍の山の 橿原の〈巻一・二九〉 柿本人麻呂
楽浪の志賀の唐崎幸くあれど〈巻一・三十〉 柿本人麻呂
楽浪の志賀の大わだ淀むとも〈巻一・三十一〉 柿本人麻呂
我背子を大和へ遣ると小夜ふけて〈巻二・一〇五〉 大伯皇女
二人行けど行き過ぎ難き秋山を〈巻二・一〇六〉 大伯皇女
磐代の浜松が枝を引き結び〈巻二・一四一〉 有間皇子
家にあれば笥に盛る飯を〈巻二・一四二〉 有間皇子
天飛ぶや軽の路は 吾妹子が里にしあれば〈巻二・二〇七〉 柿本人麻呂

次頁

前頁

秋山の黄葉を茂み迷ひぬる〈巻二・二〇八〉 柿本人麻呂
黄葉の散りゆくなべに〈巻二・二〇九〉 柿本人麻呂
うつせみと 思ひし時に〈巻二・二一〇〉 柿本人麻呂
去年見てし秋の月夜は照らせれど〈巻二・二一一〉 柿本人麻呂
衾道を引手の山に妹を置きて〈巻二・二一二〉 柿本人麻呂
天地の分かれし時ゆ〈巻三・三一七〉 山部赤人 富士の山を望める歌
田児の浦ゆうち出でて見れば真白にそ〈巻三・三一八〉 山部赤人 反歌
憶良らは今は罷らむ〈巻三・三三七〉 山上憶良
験なき物を思はずは〈巻三・三三八〉 大伴旅人 酒を讃むる歌
あな醜く賢しらをすと〈巻三・三四四〉 大伴旅人 酒を讃むる歌
我妹子が見し鞆之浦の室の木は〈巻三・四四六〉 大伴旅人
秋さらば見つつ偲へと〈巻三・四六四〉 大伴家持
瓜食めば 子等思ほゆ〈巻五・八〇二〉 山上憶良
銀も金も玉も何せむに〈巻五・八〇三〉 山上憶良 反歌
梅花の歌三十二首并せて序〈巻五〉 大伴旅人 新元号「令和」典拠
わが園に梅の花散る〈巻五・八二二〉 大伴旅人
風雜り雨降る夜の雨雜り雪降る夜は〈巻五・八九二〉 山上憶良 貧窮問答歌
世間を憂しと恥しと思へども〈巻五・八九三〉 山上憶良 貧窮問答歌 反歌
やすみしし わご大君の 高知らす〈巻六・九二三〉 山部赤人

次頁

前頁

み吉野の象山の際の木末には〈巻六・九二四〉 山部赤人
ぬばたまの夜の更けぬれば〈巻六・九二五〉 山部赤人
士やも空しかるべき〈巻六・九七八〉 山上憶良
白珠は人に知らえず〈巻六・一〇一八〉 元興寺の僧の自ら嘆く歌
あしひきの山河の瀬の鳴るなへに〈巻七・一〇八八〉 柿本人麻呂
命をし幸くよけむと石走る〈巻七・一一四二〉 詠人知らず 新追加
石激る垂水の上のさ蕨の〈巻八・一四一八〉 志貴皇子の懽びの歌
春の野にすみれ摘みにと来し吾ぞ〈巻八・一四二四〉 山部赤人
明日よりは春菜摘まむと〈巻八・一四二七〉 山部赤人
春の日の霞める時に〈巻九・一七四〇〉 高橋虫麿 水江の浦島の子よめる歌
常世辺に住むべきものを〈巻九・一七四一〉 高橋虫麿 反歌
旅人の宿りせむ野に霜降らば〈巻九・一七九一〉 遣唐使の母が子に贈れる歌
鶏が鳴くあづまの国に〈巻九・一八〇七〉 高橋虫麿 勝鹿の真間娘子をよめる歌 新追加
勝鹿の真間の井を見れば〈巻九・一八〇八〉 高橋虫麿 反歌 新追加
君が行く海辺の宿に〈巻一五・三五八〇〉 新羅に遣はされし使人の贈答歌
君が行く道の長手を〈巻一五・三七二四〉 中臣宅守と狭野茅上娘子の贈答歌
我妹子が形見の衣なかりせば〈巻一五・三七三三〉 中臣宅守と狭野茅上娘子の贈答歌
帰りける人来たれりと〈巻十五・三七七二〉 中臣宅守と狭野茅上娘子の贈答歌
春の苑紅にほふ桃の花〈巻十九・四一三九〉 大伴家持

次頁

前頁
父母が頭掻き撫で幸くあれて〈巻二十・四三四六〉防人歌
唐衣裾に取りつき泣く子らを〈巻二十・四四〇六〉防人歌
新しき年の初めの初春の〈巻二十・四五一六〉大伴家持　万葉集最後の歌
当社について（コピーライト表示・お問い合わせ）

天皇、香具山に登りて望国したまふ時の御製歌

大和には　群山あれど　とり
よろふ　天の香具山　登り立
ち　国見をすれば　国原は　煙
立ち立つ　海原は　鴎立ち立つ
美し国ぞ　蜻蛉島　大和の国は

〈巻一・二〉

舒明天皇が香具山に登って望国をされた時に作られた歌

天皇、香具山に登りて望国したまふ時の御製歌

大和にはたくさんの山があるが、

大和には　群山あれど　とり

とりわけ立派な天の香具山。

よろふ　天の香具山　登り立

その頂に登り立って国中を見渡せば、

ち　国見をすれば　国原は　煙

国の平原には煙があちらこちらに立ち、

立ち立つ　海原は　鷗立ち立つ

池の水面には水鳥があちらこちらに飛び立っている。

美しく豊かな国だなあ、この蜻蛉島、大和の国は。

美し国ぞ　蜻蛉島　大和の国は

〈巻一・二〉

次の歌へ

額田王の歌

熟田津に船乗りせむと月待
てば潮もかなひぬ今は漕ぎ
出でな

〈巻一・八〉

額田王の歌

額田王の歌

伊予の国熟田津の港で船出をしようと月の昇るのを待っていたら、

熟田津に船乗りせむと月待てば潮もかなひぬ今は漕ぎ出でな

潮も満ちて来て船出に好都合だ、さあ今漕ぎ出そう。

〈巻一・八〉

前の歌へ
次の歌へ
語句解説　解説サイト　目次　非表示　朗読音声

中大兄の歌

わたつみの豊旗雲に入日さし
こよひの月夜あきらけくこそ

〈巻一・一五〉

中大兄皇子の歌

中大兄の歌

海上の豊かに旗のようになびいている雲に入り日が差し込んでいる、

わたつみの豊旗雲に入日さし
こよひの月夜あきらけくこそ

今夜の月夜は明るくすみ渡っていることだろう。

〈巻一・一五〉

前の歌へ
次の歌へ
朗読音声
非表示
目次
解説サイト
語句解説

天皇の内大臣藤原朝臣に詔して、春山の万花の艶、秋山の千葉の彩を競はしめ給ふ時、額田王歌を以て判ずるの歌

冬ごもり　春さり来れば　鳴かざりし　鳥も来鳴きぬ　咲かざりし　花も咲けれど　山を茂み　入りても取らず　草深み　取りても見ず　秋山の　木の葉を見ては　黄葉をば　取りてぞ偲ぶ　青きをば　置きてぞ嘆く　そこし恨めし　秋山吾は

〈巻一・一六〉

天智天皇が内大臣藤原鎌足に詔をして、春山の万の花の艶やかさと、秋山の種々の黄葉の彩りをどちらが優れているかを競わせた時、額田王が歌で判定した歌。

天皇の内大臣藤原朝臣に詔して、春山の万花の艶、秋山の千葉の彩を競はしめ給ふ時、額田王歌を以て判ずるの歌

冬が終わり春がやって来ると、

冬ごもり　春さり来れば　鳴かざりし　鳥も来鳴きぬ　咲かざりし　花も咲けれど　山を茂み　入りても取らず　草深み　取りても見ず　秋山の　木の葉を見ては　黄葉をば　取りてぞ偲ぶ　青きをば　置きてぞ嘆く　そこし恨めし　秋山吾は

（冬の間）鳴かなかった鳥も来て鳴きます。

（冬の間）咲かなかった花も咲きますけれど、

山は木の枝や葉が茂ってしまい入って花を取ることもできません。

草が深く（草丈が高く）花を手に取って見ることもできません。

秋山の木の葉を見ては、色づいた葉を手に取って賞美することができます。

まだ色づいていない葉をそのまま置いて嘆息します。

そこを恨めしく思いますが、

秋山がすぐれているとします私は。

〈巻一・一六〉

前の歌へ
次の歌へ
語句解説　解説サイト　目次　非表示　朗読音声

天皇の、蒲生野に遊猟したまひし時に、額田王の作れる歌

あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る

〈巻一・二〇〉

天智天皇が、蒲生野に猟をして遊んだ時に、額田王が作った歌

天皇の、蒲生野に遊猟したまひし時に、額田王の作れる歌

あなたは紫草が生えた野と出入りしてはならない御料地の野を行き来しながら私を探して

あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る

おられる、野の番人は見ていないでしょうか、あなたが私に向かって袖を振るのを。

〈巻一・二〇〉

前の歌へ
次の歌へ
語句解説
解説サイト
目次
非表示
朗読音声

皇太子の答へませる御歌

紫草のにほへる妹を憎くあらば人妻ゆゑにわれ恋ひめやも

〈巻一・二一〉

皇太子大海人皇子の御返歌

皇太子の答へませる御歌

紫色の高貴であでやかなあなたを憎く思うのならば、

紫草のにほへる妹を憎くあらば人妻ゆゑにわれ恋ひめやも

人妻であるあなたなのに、私がどうして恋せずにおられましょうか。

〈巻一・二一〉

前の歌へ
次の歌へ
語句解説
解説サイト
目次
非表示
朗読音声

麻績王伊勢国伊良虞島に流さるるの時人の哀み傷みて作る歌

打麻を麻績王 白水郎なれや
伊良虞の島の珠藻苅ります

〈巻一・二三〉

麻績王が伊勢の国伊良虞島に流刑となった時に土地の人々がその様子を哀れみ傷んで作った歌

麻績王伊勢国伊良虞島に流さるるの時人の哀み傷みて作る歌

麻績王は漁夫であられるか（漁夫のはずはないのに）

打麻を麻績王 白水郎なれや
伊良虞の島の珠藻苅ります

伊良虞の島の珠藻を刈っておられる。

〈巻一・二三〉

麻續王この歌を聞きて感傷して和ふる歌

うつせみの命を惜しみ浪に
ぬれ伊良虞の島の玉藻苅り
をす

〈巻一・二四〉

麻績王がこの歌を聞いて心を動かされ応えた歌

麻績王この歌を聞きて感傷して和ふる歌

はかないこの命を惜しみ

うつせみの命を惜しみ浪に
ぬれ伊良虞の島の玉藻苅り
をす

浪にぬれて伊良虞の玉藻を刈って食べているのです。

〈巻一・二四〉

前の歌へ
次の歌へ
語句解説
解説サイト
目次
非表示
朗読音声

天皇の御製歌

春過ぎて夏来るらし
白布の衣乾したり天の香具山

〈巻一・二八〉

目次　表示

持統天皇が作られた歌

天皇の御製歌

春が過ぎて夏がやって来たらしい、

春過ぎて夏来るらし

白布の衣が干してある

白布の衣乾したり天の香具山

天の香具山に。

〈巻一・二八〉

次の歌へ

前の歌へ

近江の荒れたる都を過ぐる時、柿本朝臣人麻呂の作れる歌

玉襷 畝傍の山の 橿原の日知
の御代ゆ 生れましし 神のこ
とごと 樛の木の いやつぎつ
ぎに 天の下 知らしめしを
天にみつ 大和を置きて あを
によし 奈良山を越え いかさ
まに 思ほしめせか 天離かる
夷にはあれど 石走る 淡海の
國の 楽浪の 大津の宮に 天
の下 知らしめしけむ

近江国の荒れ果てた嘗ての都を通り過ぎる時に、

近江の荒れたる都を過ぐる時、柿本朝臣人麻呂の作れる歌

柿本朝臣人麻呂が詠んだ歌

(畝傍にかかる枕詞) 畝傍山の

玉襷 畝傍の山の

橿原の地で即位された天皇(神武天皇)

橿原の日知

の御代から、

の御代ゆ

お生まれになった

生れましし

現人神(天皇)のこと

神のこ

ごとくが、

とごと

(つぎつぎにかかる枕詞)

樛の木の

いよいよ次々に、

いやつぎつ

天下(国)を

統治なされた

ぎに 天の下 知らしめしししを

(大和にかかる枕詞)

大和国をさしおいて(後にして)、

(奈良にかかる

天にみつ 大和を置きて あを

枕詞)

奈良山を越え

どのように

によし 奈良山を越え いかさ

思われたのか(何を思われたのか)

空の彼方の遠く離れた

まに 思ほしめせか 天離かる

いなかではあるけれど

(近江にかかる枕詞)

近江の国の

夷にはあれど 石走る 淡海の

(大津にかかる枕詞)

大津の宮で

國の 楽浪の 大津の宮に 天

天下(国)を

統治なされたという

の下 知らしめしけむ

前の歌へ

次の頁へ

語句解説 解説サイト 目次 非表示 朗読音声

天皇の 神の尊の 大宮は ここと聞けども 大殿は ここと言へども 春草の 茂く生ひたる霞立つ 春日の霧れる ももしきの 大宮処 見れば悲しも

〈巻一・二九〉

天皇である
天皇の 神の尊の 大宮は ここ
聞くけれども
と聞けども 大殿は ここと言
御殿は
ここだと言うけれど
へども 春草の 茂く生ひたる
（今はもう）春草が
生い茂って
霞が立ち
霞立つ 春日の霧れる ももしき
春の日がかすんでいる
（大宮にかかる枕詞）
皇宮の辺りを
の 大宮処 見れば悲しも
見ればもの悲しいものだ。

〈巻一・二九〉

前の頁へ
次の歌へ
語句解説 解説サイト 目次 非表示 朗読音声

近江の荒れたる都を過ぐる時、柿本朝臣人麻呂の作れる歌の反歌（その一）

楽浪の志賀の辛崎幸くあれど大宮人の船待ちかねつ

〈巻一・三十〉

近江国の荒れ果てた昔ての都を通り過ぎる時に、柿本朝臣人麻呂が詠んだ歌の反歌

近江の荒れたる都を過ぐる時、柿本朝臣人麻呂の作れる歌の反歌（その一）

志賀の辛崎は今も変わらずにあるけれど、大宮人を乗せた船はいくら待っても帰ってこないのだ。

楽浪の志賀の辛崎幸くあれど大宮人の船待ちかねつ

〈巻一・三十〉

前の歌へ
次の歌へ
朗読音声
非表示
目次
解説サイト
語句解説

近江の荒れたる都を過ぐる時、柿本朝臣人麻呂の作れる歌の反歌（その二）

楽浪の志賀の大わだ淀むとも
昔の人にまたも会はめやも

〈巻一・三十一〉

近江国の荒れ果てた昔ての都を通り過ぎる時に、柿本朝臣人麻呂が詠んだ歌の反歌

近江の荒れたる都を過ぐる時、柿本朝臣人麻呂の作れる歌の反歌（その二）

志賀の大きな入り江の水は流れ消えないまま淀んでいるけれども、

楽浪の志賀の大わだ淀むとも昔の人にまたも会はめやも

（淀みの如くに）昔の人にまた会えるだろうか（いやもう会えやしない）。

〈巻一・三十一〉

前の歌へ
次の歌へ
朗読音声
非表示
目次
解説サイト
語句解説

大津皇子のひそかに伊勢に下りて上来ります時に、大伯皇女の作りませる御歌二首

我背子を大和へ遣るとさ夜更けて暁露に吾が立ち濡れし

〈巻二・一〇五〉

大津皇子が密かに伊勢神宮に姉の大伯皇女を訪ね、その別れ際に大伯皇女が作った歌

大津皇子のひそかに伊勢に下りて上来ります時に、大伯皇女の作りませる御歌二首

弟を大和に帰そうと見送るつもりが、名残が尽きぬままに夜が更けて、

我背子を大和へ遣るとさ夜更けて暁露に吾が立ち濡れし

暁の露に私は立ったまま濡れていることだ。

〈巻二・一〇五〉

前の歌へ
次の歌へ
語句解説
解説サイト
目次
非表示
朗読音声

大津皇子のひそかに伊勢に下りて上来ります時に、大伯皇女の作りませる御歌二首

二人行けど行き過ぎ難き秋山をいかにか君が独り越ゆらむ

〈巻二・一〇六〉

大津皇子が密かに伊勢神宮に姉の大伯皇女を訪ね、その別れ際に大伯皇女が作った歌

大津皇子のひそかに伊勢に下りて上来ります時に、大伯皇女の作りませる御歌二首

二人で行ってもうら寂しい秋の山を、何を思いながらあなたは一人で越えて行くのだろう。

二人行けど行き過ぎ難き秋山をいかにか君が独り越ゆらむ

〈巻二・一〇六〉

前の歌へ
次の歌へ
語句解説
解説サイト
目次
非表示
朗読音声

有間皇子の自ら傷みて松が枝を結べる御歌二首

盤代の浜松が枝を引き結び
真幸くあらばまた還り見む

〈巻二・一四一〉

有間皇子が自らの運命を傷んで（悲しんで）松の枝を結んで詠まれた歌

有間皇子の自ら傷みて松が枝を結べる御歌二首

盤代の浜辺にある松の枝を引き結んで無事を祈ろう、

盤代の浜松が枝を引き結び

もし幸いに無事であったならまたここに帰って来て引き結んだこの松の枝を見よう。

真幸くあらばまた還り見む

〈巻二・一四一〉

前の歌へ
次の歌へ
朗読音声
非表示
目次
解説サイト
語句解説

有間皇子の自ら傷みて松が枝を結べる御歌二首

家にあれば笥に盛る飯を
草枕旅にしあらば椎の葉に
盛る

〈巻二・一四二〉

有間皇子が自らの運命を傷んで（悲しんで）松の枝を結んで詠まれた歌

有間皇子の自ら傷みて松が枝を結べる御歌二首

家に居れば食器に盛って神にお供えする飯（神饌の御飯）を

草を枕にする旅の道中であるので椎の葉に盛って神にお供えする

家にあれば笥に盛る飯を
草枕旅にしあらば椎の葉に
盛る

〈巻二・一四二〉

前の歌へ
次の歌へ
朗読音声
非表示
目次
解説サイト
語句解説

柿本朝臣人麿、妻死りし後、泣血哀慟して作れる歌二首

天飛ぶや 軽の路は 吾妹子が
里にしあれば ねもころに見
まく欲しけど 止まず行かば
人目を多み まねく行かば 人
知りぬべみ 狭根葛 後も逢は
むと 大船の 思ひ憑みて 玉か
ぎる 磐垣淵の 隠りのみ 恋ひ
つつあるに 渡る日の 暮れぬ
るが如 照る月の 雲隠る如
沖つ藻の 靡きし妹は 黄葉の

前の歌へ

柿本人麿が、妻が亡くなった後、血の涙が出る程泣き悲しんで作った歌　二首

柿本朝臣人麿、妻死りし後、泣血哀慟して作れる歌二首

天飛ぶや　軽の路は　吾妹子が
（軽の地は、）（私の妻が住んでいる里である）
里にしあれば　ねもころに　見
（から、）（よくよく（ねんごろに））
まく欲しけど　止まず行かば
（見たいけれど、）（絶えず行ったなら、）
人目を多み　まねく行かば　人
（人目に触れることも多く）（たびたび何度も行ったなら、）（人が）
知りぬべみ　狭根葛　後も逢は
（知ってしまうだろうから、一時別れてもまたからみ合う狭根葛のように、今は一時別れても後で会おうと、）
むと　大船の　思ひ憑みて　玉か
（大船を頼りにする様な気持ちで心に思い頼んで、）
ぎる　磐垣淵の　隠りのみ　恋ひ
（岩が垣のようにめぐっている淵に隠れるように、）（ひっそりと恋していたのに、）
つつあるに　渡る日の　暮れぬ
（空を渡る太陽がやがて暮れるように、）
るが如　照る月の　雲隠る如
（照り輝いていた月が雲に隠れるように、）
沖つ藻の　靡きし妹は　黄葉の
（沖の藻が波になびくように私になびいた妻は、）

次の頁へ

過ぎて去にきと 玉梓の 使の言へば 梓弓 おとに聞きて 言はむすべ せむすべ知らに おとのみを 聞きてあり得ねば わが恋ふる 千重の一重も 慰むる 情もありやと 吾妹子が やまず出で見し 軽の市にあが立ち聞けば 玉襷 畝傍の山に 鳴く鳥の 声も聞こえず 玉鉾の 道行く人も 一人だに 似てし行かねば すべをなみ 妹が名喚びて 袖ぞ振りつる

〈巻二・二〇七〉

死んでしまったと
過ぎて去にきと 玉梓の 使の言
（妻の里から来た）使者が
言えば、
へば 梓弓 おとに聞きて 言はむ
その話しを聞いて、
何と言ってよいか、
すべ せむすべ知らに おとのみ
どうすればよいかもわからない。
話しだけを
を聞きてあり得ねば わが恋ふ
聞いてそのまま何もしないことはできないので、
私が妻を愛おしく思う気持ち
る千重の一重も 慰むる 情もあ
千分の一でも
慰められ、
心が晴れるだろうかと
りやと 吾妹子が やまず出で見
私の妻が、
いつも出て見ていた
し 軽の市にあが立ち聞けば 玉
軽の地の市に一人たたずんで耳をすませて聞いてみたが、
妻の声は聞こえず、
襷 畝傍の山に 鳴く鳥の 声も聞
道を歩いて行く人も
一人として
こえず 玉鉾の 道行く人も 一人
妻に似ている人は歩いていないので、
しかたなく
だに 似てし行かねば すべをな
妻の名を呼んで、
袖を振ったことだ。
み 妹が名喚びて 袖ぞ振りつる

〈巻二・二〇七〉

前の頁へ
次の歌へ
語句解説 解説サイト 目次 非表示 朗読音声

柿本朝臣人麿、妻死りし後、泣血哀慟して作れる歌　反歌

秋山の黄葉を茂み迷ひぬる妹を求めむ山道知らずも

〈巻二・二〇八〉

柿本人麿が、妻が亡くなった後、血の涙が出る程泣き悲しんで作った歌の反歌

柿本朝臣人麿、妻死りし後、泣血哀慟して作れる歌　反歌

秋山の黄葉を茂み迷ひぬる妹

秋山の黄葉が茂っているので、道に迷ってしまった妻を探し出そうにも、その山道がわからないことだ。

を求めむ山道知らずも

〈巻二・二〇八〉

前の歌へ
次の歌へ
語句解説　解説サイト　目次　非表示　朗読音声

柿本朝臣人麿、妻死りし後、泣血哀慟して作れる歌　反歌

黄葉の散りゆくなべに玉梓の
使を見れば逢ひし日思ほゆ

〈巻二・二〇九〉

柿本人麿が、妻が亡くなった後、血の涙が出る程泣き悲しんで作った歌の反歌

柿本朝臣人麿、妻死りし後、泣血哀慟して作れる歌　反歌

もみじが散っていくのを見ているその時に、

妻の死を知らせる

黄葉の散りゆくなべに玉梓の

使者を見れば、

はじめて妻と会った日のことが思い出される。

使を見れば逢ひし日思ほゆ

〈巻二・二〇九〉

次の歌へ
前の歌へ
語句解説　解説サイト　目次　非表示　朗読音声

柿本朝臣人麿、妻死りし後、泣血哀慟して作れる歌二首

うつせみと思ひし時に（一に云ふ、うつそみと思ひし）取り持ちて わが二人見し 走出の 堤に立てる 槻の木の こちごちの枝の 春の葉の 茂きが如く 思へりし 妹にはあれど たのめりし 児らにはあれど 世の中を 背きし得ねば かぎろひの 燃ゆる荒野に 白妙の 天領巾隠り 鳥じもの 朝立ちいまして 入日なす

柿本人麿が、妻が亡くなった後、血の涙が出る程泣き悲しんで作った歌　二首

柿本朝臣人麿、妻死りし後、泣血哀慟して作れる歌二首

この世に現に生きている人と思っていた時（生きていた時）に、

うつせみと思ひし時に（一に云ふ、うつそみと思ひし）取り持ちて（手を取り合って）わが（私たち二人で見た）二人見し走出の（走出の）堤に立ってる（堤に立っている）槻の（槻の木の）木のこちごちの（あちこちの枝の）枝の春の（春の葉の）葉の茂きが（茂っているように、）如く思へりし妹に（今が女盛りと）思っていた妻ではあるが、はあれど（たのみにしていた妻ではあったが、）たのめりし児らに（たのみにしていた妻ではあったが、）はあれど世の（世の中の道理を背くことができないで、）世の中を背きし得ねば（世の中の道理を背くことができないで、）かぎろひの（かげろうの）燃ゆる（燃える荒野に）荒野に白妙の（白い布のショールをまとった天女が雲に隠れるように、）天領巾隠り（天領巾隠れるように、）鳥じもの（鳥のように）朝立ちいまして（朝立っていかれて、）入日なす（入り日のように）

隠りにしかば 吾妹子が 形見
に置ける みどり児の 乞ひ泣
くごとに 取り与ふ 物し無け
れば 男じもの 腋はさみ持ち
吾妹子と 二人わが宿し 枕づ
く 嬬屋の内に 昼はもうらさ
び暮し 夜はも 息づき明し 嘆
けども せむすべ知らに 恋ふ
れども 逢ふ因を無み 大鳥の
羽易の山に わが恋ふる 妹は
座すと 人の言へば 石根さく

隠れてしまい（死んでしまい）、
隠りにしかば 吾妹子が 形見
妻が　形見として
置いて（残して）いった
に置ける みどり児の 乞ひ泣
幼子（赤ん坊）の　（乳を）乞うて（欲しがって）
泣くごとに
くごとに 取り与ふ 物し無け
与える　もの（乳）もないので
男であるのに
れば 男じもの 腋はさみ持ち
（子を）脇にはさんで抱きかかえ
妻と
吾妹子と 二人わが宿し 枕づ
二人で寝た
寝室の中で
く 嬬屋の内に 昼はもうらさ
昼はもう　もの寂しく暮らし
夜はもう
び暮し 夜はも 息づき明し 嘆
ため息ばかりをついて明かし、　嘆いて
どうすればよいかわからず（どうしようもなく）
けども せむすべ知らに 恋ふ
も　恋うても（恋い
逢うことができないので
求めても）
れども 逢ふ因を無み 大鳥の
大鳥の
羽易の山に
私の恋しい
羽易の山に わが恋ふる 妹は
妻はいますと
人が言うので
岩や木の間を踏み分けて
座すと 人の言へば 石根さく

みてなづみ来し吉けくもぞ
なきうつせみと思ひし妹が
玉かぎるほのかにだにも見
えぬ思へば

〈巻二・二二〇〉

前の頁へ

あえぎながら来たけれど、
よいことなどなかった。

みてなづみ来し吉けくもぞ

この世にいると（生きていると）
思った妻が、

なきうつせみと思ひし妹が

ほのかにさえも

玉かぎるほのかにだにも見

見えないことを思うと。

えぬ思へば

〈巻二・二二〇〉

次の歌へ

柿本朝臣人麿、妻死りし後、泣血哀慟して作れる歌　反歌

去年見てし秋の月夜は照らせれど相見し妹はいや年さかる

〈巻二・二二一〉

柿本人麿が、妻が亡くなった後、血の涙が出る程泣き悲しんで作った歌の反歌

柿本朝臣人麿、妻死りし後、泣血哀慟して作れる歌　反歌

去年見た秋の月は今夜も照り輝いているけれど、

去年見てし秋の月夜は照らせれど相見し妹はいや年さかる

ともにながめた妻は亡くなってからいよいよ年月が過ぎていく

〈巻二・二一一〉

前の歌へ
次の歌へ
朗読音声
非表示
目次
解説サイト
語句解説

柿本朝臣人麿、妻死りし後、泣血哀慟して作れる歌　反歌

衾道を引手の山に妹を置きて山路を行けば生けりともなし

〈巻二・二一二〉

柿本人麿が、妻が亡くなった後、血の涙が出る程泣き悲しんで作った歌の反歌

柿本朝臣人麿、妻死りし後、泣血哀慟して作れる歌　反歌

衾道を通り引手の山に妻を置いて（葬って）

衾道を引手の山に妹を置きて
山路を行けば生けりともなし

山路を行くと（帰ると）生きているようにも思えない（生きた心地がしない）

〈巻二・二一二〉

前の歌へ
次の歌へ
朗読音声
非表示
目次
解説サイト
語句解説

山部宿禰赤人が不盡山を望める歌一首

天地の 分れし時ゆ 神さびて
高く貴き 駿河なる 不尽の高
嶺を 天の原 振り放け見れば
渡る日の 影も隠らひ 照る月
の 光も見えず 白雲も い行き
はばかり 時じくそ 雪は降り
ける 語り継ぎ 言ひ継ぎ行か
む 不尽の高嶺は

〈巻三・三一七〉

山部赤人が富士山を望み見て詠んだ歌

山部宿禰赤人が不盡山を望める歌一首

天と地の分かれた太古の昔より、
天地の 分れし時ゆ 神さびて
神々しくて
高く貴い、
高く貴き 駿河なる 不尽の高
駿河の国にある
富士の高き嶺（峰）を
天高く（大空に向かって）振り仰いで見れば、
嶺を 天の原 振り放け見れば
空を渡る太陽の光も富士の陰に隠れ、
渡る日の 影も隠らひ 照る月
照り輝く月の光も富士
にさえぎられて見えず、
の 光も見えず 白雲も い行き
白雲も行くことを遠慮して（行く手を阻まれ）、
時節を問わず雪が降る（四季を通じてその頂きには雪が降り
はばかり 時じくそ 雪は降り
積もっている）。子々孫々語り継ぎ言い伝えていこう、
ける 語り継ぎ 言ひ継ぎ行か
この富士の高き嶺（峰）を。
む 不尽の高嶺は

〈巻三・三一七〉

前の歌へ
次の歌へ
語句解説　解説サイト　目次　非表示　朗読音声

山部宿禰赤人が不盡山を望める歌の反歌

田児の浦ゆうち出でて見れば真白にそ不尽の高嶺に雪は降りける

〈巻三・三一八〉

山部赤人が富士山を望み見て詠んだ歌の反歌

山部宿禰赤人が不盡山を望める歌の反歌

田子の浦を通って眺望のよい場所に出て見れば、

田児の浦ゆうち出でて見れば真白にそ不尽の高嶺に雪は降りける

真っ白に富士の頂きに雪が降っていることだ（頂きに真っ白に雪を冠った富士が現れ出たことだ）。

〈巻三・三一八〉

山上憶良臣の宴を罷るの歌一首

憶良らは今は罷らむ 子泣く
らむ そのかの母も吾を待つ
らむそ

〈巻三・三三七〉

山上憶良の臣が宴を退出（中座）する歌一首

山上憶良臣の宴を罷るの歌一首

私憶良は、そろそろ退出させていただきましょう。

幼子が私の帰りを待って泣いている

憶良らは今は罷らむ子泣くらむそその母も吾を待つらむそ

ことでしょう。

その泣いている子の母親も私を待っていることでしょう。

〈巻三・三三七〉

前の歌へ
次の歌へ
朗読音声
非表示
目次
解説サイト
語句解説

太宰師大伴卿の酒を讃むるの歌

験なき物を思はずは
一杯の濁れる酒を飲むべく
あるらし

〈巻三・三三八〉

大伴旅人が酒の徳を賞賛する歌

太宰師大伴卿の酒を讃むるの歌

考えても仕方ない事をくよくよと思わず、

一杯の濁酒でも飲む事にしよう。

験なき物を思はずは一杯の濁れる酒を飲むべくあるらし

〈巻三・三三八〉

前の歌へ
次の歌へ
語句解説
解説サイト
目次
非表示
朗読音声

太宰師大伴卿の酒を讃むるの歌

あな醜く賢しらをすと酒飲
まぬ人をよく見れば猿にか
も似る

〈巻三・三四四〉

大伴旅人が酒の徳を賞賛する歌

太宰師大伴卿の酒を讃むるの歌

ああ醜い（身苦しい）事だ、利口ぶって酒を飲まぬ人をよく見れば、

あな醜く賢しらをすと酒飲まぬ人をよく見れば猿にか（猿によく似ていると）も似る（でもいおうか。）

〈巻三・三四四〉

前の歌へ
次の歌へ
語句解説　解説サイト　目次　非表示　朗読音声

天平二年庚午冬十二月、太宰帥大伴卿の京に向きて上道せし時に作れる歌

我妹子が見し鞆之浦の室の木は常世にあれど見し人ぞなき

〈巻三・四四六〉

天平二年十二月大伴旅人が九州の太宰府から奈良の都へ向かう途中に作った歌

天平二年庚午冬十二月、太宰帥大伴卿の京に向きて上道せし時に作れる歌

私の妻が見た鞆の浦の室の木は、

我妹子が見し鞆之浦の室の木は常世にあれど見し人ぞなき

いつまでも変わらずあるのに、それを見た人（私の妻）はもうこの世にいない。

〈巻三・四四六〉

前の歌へ
次の歌へ
朗読音声
非表示
目次
解説サイト
語句解説

家持が砌の上の瞿麦の花を見て作れる歌

秋さらば見つつ偲へと
妹が植ゑし庭の石竹咲きに
けるかも

〈巻三・四六四〉

大伴家持が軒下の敷石の上に咲いたなでしこの花を見て作った歌

家持が砌の上の瞿麦の花を見て作れる歌

秋になったらこの花をながめつつ私のことを思い出してください、亡き妻が植えた庭のなでしこが咲いたことだ。

秋さらば見つつ偲へと
妹が植ゑし庭の石竹咲きに
けるかも

〈巻三・四六四〉

前の歌へ
次の歌へ
語句解説
解説サイト
目次
非表示
朗読音声

子等を思へる歌一首并せて序

釈迦如来、金口に正に説きたまはく、等しく衆生を思ふこと羅候羅の如しと。又説きたまはく、愛は子に過ぎたるはなしと。至極の大聖すら尚子を愛しむ心あり。況むや世間の蒼生、誰かは子を愛しまざらめや。

瓜食めば 子等思ほゆ 栗食めば まして思はゆ 何処より
来たりしものぞ まなかひに
もとな懸りて 安眠しなさぬ

〈巻五・八〇二〉

子供を思う歌一首併せて序

子等を思へる歌一首并せて序

釈迦如来が、尊いそのお口で説かれるには、

釈迦如来、金口に正に説きたまはく、

私が等しく人々を愛しいと思う

等しく衆生を思

気持ちは息子羅候羅を愛しいと思う気持ちと同じである。

ふこと羅候羅の如しと。

又説かれるには、

又説きたまはく、

愛しさ（よろこび）は子供に対して以上のものはない。

愛は子に過

ぎたるはなしと。

釈迦のようなこのうえない大聖人でさえ、なお子供を愛しく思う心があるのだ。

誰が子供を愛しいと思わないことがあるだろうか（いやありはしない）。

至極の大聖すら尚子を愛しむ心あり。

まして世間の人々で、

況むや世間の蒼生、誰かは子を愛しまざらめや。

瓜を食べると、

瓜食めば

子供のことが思い出される。

子等思ほゆ

栗を食べると、

栗食め

なおいっそう子供のことが思い出される。

ばまして思はゆ

この思いはどこから来るものだろう。

何処より

目の前にその姿がただもうむやみに

来たりしものぞ

ちらついて、

まなかひに

安らかに眠らせないのだ。

もとな懸りて

安眠しなさぬ

〈巻五・八〇二〉

前の歌へ

次の歌へ

語句解説　解説サイト　目次　非表示　朗読音声

子らを思へる歌の反歌

銀も金も玉も何せむに
勝れる宝子に及かめやも

〈巻五・八〇三〉

子供を思う歌の反歌

子らを思へる歌の反歌

銀も金も宝玉も

銀も金も玉も何せむに
勝れる宝子に及かめやも

それが何であろう。

それより勝る宝である子に及ぶだろうか（及ぶはずもない）。

〈巻五・八〇三〉

前の歌へ
次の歌へ
朗読音声
非表示
目次
解説サイト
語句解説

梅花の歌三十二首并せて序

天平二年正月十三日に、師の老の宅に萃まりて、宴会を申く。時に、初春の令月にして、気淑く風和ぎ、梅は鏡前の粉を披き、蘭は珮後の香を薫す。加之、曙の嶺に雲移り、松は羅を掛けて蓋を傾け、夕の岫に霧結び、鳥はうすものに封められて林に迷ふ。庭には新蝶舞ひ、空には故雁帰る。

梅花の歌三十二首並びに序

梅花の歌三十二首并せて序

天平二年の正月の十三日、

天平二年正月十三日に、師の老の宅に萃まりて、宴会を申く。時に、初春の令月にして、気淑く風和ぎ、梅は鏡前の粉を披き、蘭は珮後の香を薫す。加之、曙の嶺に雲移り、松は羅を掛けて蓋を傾け、夕の岫に霧結び、鳥はうすものに封められて林に迷ふ。庭には新蝶舞ひ、空には故雁帰る。

宴会を開いた。

大宰師（大伴旅人）

時に（季節は）、初春の何をするにもよい月（頃）で、

梅は鏡の前で白粉をぬって化粧する美女のように

大気はよく（澄み渡り）風も穏やかで、

蘭（蘭草）は礼服におびだまを身につけた貴人の（高貴な）香りを漂わす。

（真っ白な花を）開き、

夜が明けようとする山の頂に雲がかかり、

それだけでなく、

松は絹で織った薄物のベール

夕刻には山の窪地に霧が

（のような雲）を掛けて（まるで）きぬがさを傾けて（差し掛けて）いるようで、

鳥は薄霧に封じ込められて林の中で迷っている。

かかり、

庭には新しく生まれた蝶が舞い、

空には昨年飛来した雁が北へ帰っていく。

前の歌へ
次の頁へ
語句解説　解説サイト　目次　非表示　朗読音声

ここに天を蓋とし、地を座とし、膝を促け觴を飛ばす。言を一室の裏に忘れ、衿を煙霞の外に開く。淡然と自ら放にし、快然と自ら足る。若し翰苑にあらずは、何を以ちてか情を述べむ。詩に落梅の篇を紀す。古と今とそれ何そ異ならむ。宜しく園の梅を賦して聊かに短詠を成すべし。〈巻五〉

ここに天を蓋（屋根）とし、
ここに天を蓋とし、地を座とし、
大地を座とし、
膝を促け觴を飛ばす。言
お互いに膝を近づけ酒盃を交わす。
（楽しさのあまり）言葉をこの一室の中では忘れ（たかのようで）、
を一室の裏に忘れ、衿を煙霞
整えていた着物の衿を外気に向けて開き（胸襟を開いて）打ちとけ合う。
の外に開く。淡然と自ら放に
物事にこだわらず自らの心を開放して（心のおもむくままに）、
心地よい気分でただ満ち足りている。
し、快然と自ら足る。若し翰
もし文筆（文章）によるのでなければ、
苑にあらずは、何を以ちてか
どのようにしてこの心情を述べる（表現する）ことができるだろう（いやできはしない）。
情を述べむ。詩に落梅の篇を
（中国の）漢詩にも落梅の詩がある。
（この情景を表現するのに）古と今と（古の中国の漢詩と今の日本の和歌と）何が異なるだろう
紀す。古と今とそれ何そ異な
（何も異なりはしない）。
さあよろしく園の梅を題としていささか（ちょっとばかり）和歌を詠もうではないか。
らむ。宜しく園の梅を賦して
聊かに短詠を成すべし。〈巻五〉

前の頁へ
次の歌へ
語句解説　解説サイト　目次　非表示　朗読音声

梅花の歌　主人

わが園に梅の花散る久方の天より雪の流れ来るかも

〈巻五・八二二〉

梅花の歌　宴の主催者（大伴旅人）

梅花の歌　主人

わが家の庭に梅の花びらが散り落ちている。

わが園に梅の花散る久方の天より雪の流れ来るかも

雪が流れ降ってくるのであろうか。

（それとも）天上より

〈巻五・八二二〉

次の歌へ
前の歌へ
語句解説　解説サイト　目次　非表示　朗読音声

貧窮問答の歌一首並びに短歌

風雑り 雨降る夜の 雨雑り 雪降る夜は 術もなく 寒くしあれば 堅塩を 取りつづしろひ 糟湯酒 うち啜ろひて 咳ぶかひ 鼻ひしびしに しかとあらぬ 髯かき撫でて 吾を除きて 人は在らじと 誇ろへど 寒くしあれば 麻衾 引き被り 布肩衣 有りのことごと 服襲へども 寒き夜すらを 我よりも 貧しき人の 父母は 飢ゑ

貧窮問答の歌一首並びに短歌

貧窮に関する問答体の歌一首と短歌

風雑り　雨降る夜の　雨雑り　雪降る夜は　術もなく　寒くしあれば

風にまじって　雨の降る夜の、　その雨にまじって　雪の降る夜は、　どうしようもなく　寒いので、

堅塩を　取りつづしろひ　糟湯酒　うち啜ろひて　咳ぶかひ　鼻ひしびしに　しかとあらぬ　髯かき撫で　吾を除きて　人は在らじと

堅塩を　手に取って少しづつ食べ、　糟湯酒を　すすりすすりして、　咳をして　鼻をぐずぐずすすり、　ろくにあるわけでもない（生えていない）　髯をかき撫でて、　（この世に）自分を除いて　（他に）才能のある人物は おるまいと

誇ろへど　寒くしあれば　麻衾　引き被り　布肩衣　有りのことごと　服襲へども　寒き夜すらを　我よりも　貧しき人の　父母は　飢ゑ

誇ってみれども、　寒いので、　麻の夜具を　引き　かぶり、　布肩衣を　ありったけ　重ねて着るのだけれども、　寒い夜なのにさらに、　私よりも　貧しい人の　父母は、　餓えて

寒からむ 妻子どもは 乞いて
泣くらむ 此の時は 如何にし
つつか 汝が世は渡る
天地は 広しといへど 吾が為
は 狭くやなりぬる 日月は 明
しといへど 吾が為は 照りや
給はぬ 人皆か 吾のみや然る
わくらばに 人とは生るを 人
並みに 吾も作れるを 綿も無
き 布肩衣の 海松の如 わわけ
さがれる 襤褸のみ 肩に打ち

寒がっているだろう。
寒からむ 妻子どもは 乞いて
妻と子供達は
（食べ物と衣服を）欲しがって
泣いているだろう。
泣くらむ 此の時は 如何にし
こんな（こんな生活苦の）時は、どのようにして
つつか 汝が世は渡る
あなたは世を渡っているのか。
天地は
天地は 広しといへど 吾が為
広いというけれども、
自分のためには
狭くなったのだろうか。
は 狭くやなりぬる 日月は 明
太陽と月は
明るい
と言うけれども、
私の為には
照ってくれない
しといへど 吾が為は 照りや
のだろうか。
人は皆そうなのか、
自分だけがそうなのか、
給はぬ 人皆か 吾のみや然る
偶然にも（せっかく）
人として生まれてきたのに、
わくらばに 人とは生るを 人
人並みに
私も同じ体に作られているのに、
綿も入っていない
並みに 吾も作れるを 綿も無
布肩衣の
海松のように破れ下がった
き 布肩衣の 海松の如 わわけ
ぼろ着のみを
肩にかけ、
さがれる 襤褸のみ 肩に打ち

懸け 伏廬の 曲廬の内に 直土に
藁解き敷きて 父母は 枕の方に
妻子どもは 足の方に 囲み居て
憂ひ吟ひ 竈には 火気ふき立て
ず 甑には 蜘蛛の巣掻きて 飯炊
く事も忘れて 鶏鳥の 呻吟ひ居
るに いとのきて 短き物を 端截
ると 云へるが如く 楚取る 里長
が声は 寝宿戸まで 来立ち呼ば
ひぬ 斯くばかり 術無きものか
世間の道

〈巻五・八九二〉

懸け（つぶれて） 伏廬の（曲がった小屋の中に、） 曲廬の内に（土の上に直に） 直土に
藁をまき敷いて 父母は（父と母は） 枕の方に（（自分の）枕の方に、） 藁解き敷きて
妻子どもは（妻と子供は） 足の方に（（自分の）足の方に、） 枕の方に（（自分を）囲んで） 囲み居て
憂い悲しみ、 寵には（火の気はふき立たず、） 憂ひ吟ひ 寵には 火気ふき立て
甑には（蜘蛛の巣がかかり、） 蜘蛛の巣掻きて（飯を炊く） ず 甑には 蜘蛛の巣掻きて 飯炊
事さえも忘れ、（鶏鳥のような） 鶏鳥の（うめき声を出しているのに、） く 事も忘れて 鶏鳥の 呻吟ひ居
ことさらに（短い物を） 短き物を（さらにその端） るに いとのきて 短き物を 端截
言うが如くに、（ムチを持った） 村長の声は、（を切ると） ると 云へるが如く 楚取る 里長
寝ている部屋の戸口まで（伝え響き呼んでいる。） が声は 寝宿戸まで 来立ち呼ば
このように（どうしようもないものであろうか、） ひぬ 斯くばかり 術無きものか
世間の道というものは。 世間の道

〈巻五・八九二〉

前の頁へ
次の歌へ
語句解説 解説サイト 目次 非表示 朗読音声

貧窮問答の歌　反歌

世間を憂しと恥しと思へども
も飛び立ちかねつ鳥にしあ
らねば

〈巻五・八九三〉

貧窮問答の歌　反歌

世の中をつらく恥ずかしく思うけれども、

世間を憂しと恥しと思へど
飛び立って逃げることもできない、
も飛び立ちかねつ鳥にしあ
私は鳥ではないのだから。
らねば

〈巻五・八九三〉

次の歌へ
前の歌へ
語句解説　解説サイト　目次　非表示　朗読音声

神亀二年乙丑夏五月、吉野の離宮に幸しし時、山部宿禰赤人の作れる歌

やすみしし わご大君の 高知らす 吉野の宮は 畳づく 青垣隠り 川なみの 清き河内ぞ 春べは 花咲きををり 秋されば 霧立ち渡る その山の いやますますに この川の 絶ゆることなく ももしきの 大宮人は 常に通はむ

〈巻六・九二三〉

神亀二年乙丑の年の夏五月、天皇が吉野の離宮に行幸された時、山部宿禰赤人が作った歌

神亀二年乙丑夏五月、吉野の離宮に幸しし時、山部宿禰赤人の作れる歌

国の隅々までを治めておられる　わが大皇の　立派に造営な

やすみししわご大君の高知らす　吉野の宮は　幾重にも重なっている　青い山々に　畳づく青垣

さった　吉野の宮は　川の流れが　清らかな一帯（流域）である。　春の

囲まれ

隠り川なみの清き河内ぞ春べは花咲きををり秋さればべは

頃は　枝がたわみ曲がるほどに花が咲き誇り　秋になれば

霧が立ち込める。　その山のように　いよいよますますに

霧立ち渡るその山のいやますます

（繁く）　この川（の流れ）の如く　絶えることなく（永遠に）

にこの川の絶ゆることなく

大宮人（宮廷人）は

ももしきの大宮人は常に通はむ

常に（これからも）通い続けるだろう。

〈巻六・九二三〉

前の歌へ　次の歌へ

山部宿禰赤人の作れる歌　反歌

み吉野の象山の際の木末には
ここだもさわぐ鳥の声かも

〈巻六・九二四〉

山部宿禰赤人の作れる歌　反歌

山部宿禰赤人の作れる歌　反歌

吉野の象山の山間に茂り立つ木々の梢には（たくさんの鳥がいて）

み吉野の象山の際の木末には
ここだもさわぐ鳥の声かも

こんなにもさわがしく鳴く鳥の声が聞こえることだ。

〈巻六・九二四〉

前の歌へ
次の歌へ
朗読音声
非表示
目次
解説サイト
語句解説

山部宿禰赤人の作れる歌　反歌

ぬばたまの夜の更けぬれば
久木生ふる清き川原に千鳥
しば鳴く

〈巻六・九二五〉

山部宿禰赤人の作れる歌　反歌

山部宿禰赤人の作れる歌　反歌

真っ暗な
ぬばたまの夜の更けぬれば
夜が更けていき
久木が生える
久木生ふる清き川原に千鳥
清い川原に　千鳥が
しきりに鳴いている
しば鳴く

〈巻六・九二五〉

山上臣憶良が痾に沈みし時に作れる歌

土やも空しかるべき
万代に語り継ぐべき名は立てずして

〈巻六・九七八〉

山上臣憶良が病気になった時に作った歌

山上臣憶良が痾に沈みし時に作れる歌

男子たるものむなしく生涯を終えてよいものだろうか、

士やも空しかるべき

末代まで語り継がれるような立派な名を立てないで。

万代に語り継ぐべき名は立て

ずして

〈巻六・九七八〉

前の歌へ

次の歌へ

朗読音声　非表示　目次　解説サイト　語句解説

天平十年戊寅に、元興寺の僧が自ら嘆く歌一首

白珠は 人に知らえず 知らず
ともよし 知らずとも われし
知られば 知らずともよし

〈巻六・一〇一八〉

天平十年、元興寺の僧が自らを嘆いて詠った歌

天平十年戊寅に、元興寺の僧が自ら嘆く歌一首

（海中深く堅い貝に納まった）真珠は人には知られない、

白珠は 人に知らえず 知らずとも
知られなくてもよい、

よし 知らずとも われし
人に知られなくても、私さえ自分で知って

知られば 知らずともよし
人に知られなくてもよい。いれば、

〈巻六・一〇一八〉

次の歌へ
前の歌へ
語句解説
解説サイト
目次
非表示
朗読音声

雲を詠める

あしひきの山河の瀬の鳴るなへに弓月が岳に雲立ち渡る

〈巻七・一〇八八〉

雲をよむ

雲を詠める

あしひきの山河の瀬の鳴るなへに弓月が岳に雲立ち渡る

〈巻七・一〇八八〉

山間を流れる河の瀬の音が鳴り渡ってきたのにつれて弓月が岳に雲がむくむくと立ち上って広がっていくことだ。

前の歌へ
次の歌へ
朗読音声
非表示
目次
解説サイト
語句解説

摂津にて作れる

命をし幸くよけむと石走る
垂水の水をむすびて飲みつ

〈巻七・一二四二〉

摂津の国で作った（歌）

摂津にて作れる

どうかこの命が無事でありますようにと、

命をし幸くよけむと石走る

岩と岩の間から

垂れ落ちる（滴り落ちる）水を両手のひらを結んで受け止めて飲んだ。

垂水の水をむすびて飲みつ

〈巻七・一一四二〉

前の歌へ

次の歌へ

朗読音声　非表示　目次　解説サイト　語句解説

志貴皇子の懽びの御歌一首

石激る垂水の上のさ蕨の
萌え出づる春になりにける
かも

〈巻八・一四一八〉

志貴皇子が歓びの心を詠んだ歌一首

志貴皇子の懽びの御歌一首

岩の間を激しく流れ落ちる小さな滝の上の蕨の新芽の萌え出る春になったものだなあ。

石激る垂水の上のさ蕨の
萌え出づる春になりにける
かも

〈巻八・一四一八〉

前の歌へ
次の歌へ
語句解説
解説サイト
目次
非表示
朗読音声

山部宿禰赤人が歌

春の野にすみれ摘みにと来し吾ぞ野をなつかしみ一夜寝にける

〈巻八・一四二四〉

山部宿禰赤人の歌

山部宿禰赤人が歌

春の野にすみれを摘みに行こうといって来た私は、

春の野にすみれ摘みにと来し吾ぞ野をなつかしみ一夜寝にける

春の野があまりになつかしいので一夜寝てしまったことだ。

〈巻八・一四二四〉

前の歌へ
次の歌へ
語句解説
解説サイト
目次
非表示
朗読音声

山部宿禰赤人が歌

明日よりは春菜摘まむと標
めし野に昨日も今日も雪は
降りつつ

〈巻八・一四二七〉

山部宿禰赤人の歌

山部宿禰赤人が歌

明日から春の若菜を摘もうと私の摘む場所であると標識を立てた野に、

昨日も今日も雪が降り続いている。

明日よりは春菜摘まむと標
めし野に昨日も今日も雪は
降りつつ

〈巻八・一四二七〉

前の歌へ

次の歌へ

語句解説　解説サイト　目次　非表示　朗読音声

水江の浦島の子をよめる歌

春の日の霞める時に墨吉の
岸に出でゐて釣船の とをら
ふ見ればいにしへのことぞ
思ほゆる水江の浦島の子が
鰹釣り鯛釣りほこり七日ま
で家にも来ずて海界を過ぎ
て漕ぎ行くにわたつみの神
の女にたまさかにい漕ぎ向
ひ相誂ひこと成りしかばか
き結び常世に至りわたつみの

水江の浦島の子を詠んだ歌

水江の浦島の子をよめる歌

春の日の霞がたなびいている時に、
春の日の霞める時に墨吉（住吉）の
海岸に出ていって、釣舟の ゆれているのを見れば
岸に出でゐて釣船の とをら
昔のことが思い出される
ふ見れば いにしへのことぞ
水江の浦島の子が
思ほゆる水江の浦島の子が
鰹を釣り 鯛を釣り得意になって、七日間も
鰹釣り 鯛釣りほこり七日ま
家にも帰らず 海の果てを 過ぎて
で家にも来ずて海界を過ぎ
漕いで行くと 海の 神の
て漕ぎ行くにわたつみの神
乙女に 偶然に 漕いで行って出会い、
の女にたまさかにい漕ぎ向
互いに言葉をかけ合って 話しがまとまった（結婚することになった）ので、かたく
ひ相挑ひこと成りしかばか
約束して、 不老不死の仙境に至り、 海の
き結び常世に至りわたつみの

前の歌へ
次の頁へ
語句解説 解説サイト 目次 非表示 朗読音声

神の宮の内の重の妙なる殿
に携はりふたり入りゐて老
いもせず死にもせずしてな
がき世にありけるものを世
の中の愚か人の吾妹子に告
げて語らくしましくは家に
帰りて父母にことも告らひ
明日のごとわれは来なむと
言ひければ妹がいへらく常
世辺にまた帰り来て今のご
と逢はむとならばこの櫛笥

神の宮の、内側（奥）の囲いの中の、立派な御殿に

神の宮の内の重の妙なる殿

手を携えて（取って）　二人で入って（住み）

に携はりふたり入りゐて老

せず、死にもせず、暮らしていたものを　老いも　ながい

いもせず死にもせずしてな

間、世にも

がき世にありけるものを世

まあ、愚か者の（浦島の子）が、自分の妻に　告げて

の中の愚か人の吾妹子に告

言うには、しばらくは　家に帰って

げて語らくしましくは家に

父母に　ことの次第をも話し、

帰りて父母にことも告らひ

明日になれば、わたしは必ず帰って来ると

明日のごとわれは来なむと

言ったので、妻がいうには、　仙境に

言ひければ妹がいへらく常

また帰って来て　今のように

世辺にまた帰り来て今のご

会おう（一緒に暮らそう）と思うなら　この櫛笥（竹製のくし箱）

と逢はむとならばこの櫛笥

開くなゆめとそこらくに堅
めし言を墨吉に帰り来りて
家見れど家も見かねて里見
れど里も見かねてあやしと
そこに思はく家ゆ出でて三
歳の間に垣もなく家うせめ
やとこの筥を開きて見てば
もとのごと家はあらむと玉
櫛笥少し開くに白雲の筥よ
り出でて常世辺にたなびき
ぬれば立ち走り叫び袖振り

けっして開いてはいけませんと、
開くなゆめと そこらくに 堅
（繰り返し）言ったのに、 墨吉（住吉）に 帰って来て くれぐれも
めし言を 墨吉に 帰り来りて
（自分の）家を見ようとしても、家を見つけることができず、 （自分の）里を
家見れど 家も見かねて 里見
見ようとしても、里を見つけることができず、 これは変だと思い、
れど 里も見かねて あやしと
そこで思ったのは、 家を出て 三年の
そこに思はく 家ゆ出でて 三
間に、 垣根もなくなり、 家もなくなるということがあろ
歳の間に 垣もなく 家うせめ
うはずがない。 この箱を 開いてみれば、
やと この筥を 開きて見てば
もとのように 家は現われるであろうと、 美しい
もとのごと 家はあらむと 玉
櫛笥を 少し開けたところ 白雲が 箱から出て
櫛笥 少し開くに 白雲の 筥よ
仙境の方に たなびいていったので、
り出でて 常世辺に たなびき
（その白雲を取り戻そうと）立ち上がって走り出し、 叫んで袖を振り、
ぬれば 立ち走り 叫び袖振り

反側び 足ずりしつつ たちまちに 心消うせぬ 若かりし 膚も皺みぬ 黒かりし 髪も白けぬ ゆなゆなは 息さへ絶えて 後つひに 命死にける 水江の浦島の子が 家地見ゆ

〈巻九・一七四〇〉

転げ回り、
反側び 足ずりしつつ たちま
足をすりあわせて身もだえして嘆きつつ　たちまちに

ちに 心消うせぬ 若かりし 膚
気を失ってしまった。　若かった　肌も

も皺みぬ 黒かりし 髪も白け
皺だらけになり、　黒かった　髪も真っ白になってしまった。

ぬ ゆゆなは 息さへ絶えて
のちのちには（ついには）　息さえ絶え絶えとなり

後つひに 命死にける 水江の
その後に（とうとう）　死んでしまった。　その水江の

浦島の子が 家地見ゆ
浦島の子の　家があったあたりが見える。

〈巻九・一七四〇〉

前の頁へ
次の歌へ
語句解説　解説サイト　目次　非表示　朗読音声

高橋虫麿の反歌

常世辺に住むべきものを
剣刀ながき心からおそやこの君

〈巻九・一七四一〉

高橋虫麿の反歌

高橋虫麿の反歌

不老不死の仙境に住んでいることができたのに、

常世辺に住むべきものを
剣刀ながき心からおそやこの君

自分の心によって（それを捨ててしまい）なんと愚かなことだなあ、この人は。

〈巻九・一七四二〉

次の歌へ
前の歌へ
語句解説
解説サイト
目次
非表示
朗読音声

天平五年癸酉、遣唐使の船、難波を立ちて海に入る時、母が子に贈れる歌

旅人の宿りせむ野に霜降らば吾が子羽ぐくめ天の鶴群

〈巻九・一七九一〉

天平五年、遣唐使の船が難波の港を出発しようとする時、母が子に贈った歌

天平五年癸酉、遣唐使の船、難波を立ちて海に入る時、母が子に贈れる歌

旅人達が野宿する野に霜が降りたなら

旅人の宿りせむ野に霜降らば吾が子羽ぐくめ天の鶴群

どうか吾が子をその羽を広げて温めておくれ、天に舞う鶴の群れ達よ。

〈巻九・一七九一〉

前の歌へ
次の歌へ
朗読音声
非表示
目次
解説サイト
語句解説

高橋虫麻呂、勝鹿の真間娘子をよめる歌

鶏が鳴くあづまの国にいにしへにありける事と今までに絶えず言ひ来る勝鹿の真間の手児奈が麻衣に青衿着けひたさ麻を裳には織り着て髪だにも掻きは梳らずくつをだに穿かず行けども錦綾の中につつめる斎児も妹にしかめや望月の足れる面わに花のごと笑みて立て

高橋虫麻呂が、葛飾の真間に住んでいた娘の伝説を詠んだ歌

高橋虫麻呂、勝鹿の真間娘子をよめる歌

東国に昔あった事として、

鶏が鳴く あづまの国にいにしへにありける事と 今まで
（今日まで）

ずっと言い伝えられてきた

に 絶えず言ひ来る 勝鹿の 真
葛飾の真間の手児奈が、

間の手児奈が 麻衣に 青衿着
麻の衣に青い襟をつけ、

け ひたさ麻を 裳には織り
純麻（粗末な衣を作る材料）で織った裳（腰から下にまとった衣服の総称）を着て、

着て 髪だにも 掻きは梳らず
髪さえも櫛でとかしもせず、

くつをだに 穿かず行けども
くつさえはかずに行くのだけれども、

錦綾の 中につつめる 斎児も
錦や綾で織った高価な衣の中に包んで育てられた良家の子女も

妹にしかめや 望月の 足れる
この子（手児奈）にとうてい及ばない。

満月のようにまんまるい豊かな顔で

面わに 花のごと 笑みて立て
花のように笑って立っていると、

れば 夏虫の 火に入るがごと
水門入りに 舟榜ぐごとく 行
きかぐれ 人の言ふ時 幾許も
生けらじものを 何すとか 身
をたな知りて 浪の音の 騒く
湊の 奥津城に 妹が臥せる 遠
き代に ありけることを 昨日
しも 見けむがごとも 思ほゆ
るかも

〈巻九・一八〇七〉

前の頁へ

夏虫が火に入るように、
れば 夏虫の 火に入るがごと
港に船を漕ぎ入れるように、
水門入りに 舟榜ぐごとく 行
吸い寄せられ、
きかぐれ 人の言ふ時 幾許も
人が求婚したその時に、
いくばくも生きて
いかれないものを
生けらじものを 何すとか 身
どうしてだろう
白分を
一途に思いつめて（海に身を投げ死んでしまった）。波の音の騒がしい
をたな知りて 浪の音の 騒く
港の墓に
娘は眠っている。
湊の 奥津城に 妹が臥せる 遠
遠い昔にあったことが、
き代に ありけることを 昨日
昨日
見たことのように思われる。
しも 見けむがごとも 思ほゆ
るかも

〈巻九・一八〇七〉

次の歌へ

高橋虫麻呂、勝鹿の真間娘子をよめる歌の反歌

勝鹿の真間の井見れば立ち
平し水汲ましけむ手児奈し
思ほゆ

〈巻九・一八〇八〉

高橋虫麻呂、勝鹿の真間娘子をよめる歌の反歌

葛飾の真間の井戸を見ると

勝鹿の真間の井見れば立ち

地が平になるまで立ち踏み固めて水を汲んだであろう手児奈のことが思われる。

平し水汲ましけむ手児奈し

思ほゆ

〈巻九・一八〇八〉

前の歌へ
次の歌へ
朗読音声
非表示
目次
解説サイト
語句解説

新羅に遣はされし使人等、別れを悲しみて贈答し、また海路にて情を慟み思ひを陳べ、また所にあたりて誦する古歌

君が行く海辺の宿に霧立たば
吾が立ち嘆く息と知りませ

〈巻十五・三五八〇〉

遣新羅使の一行が、別離の悲しみを歌に詠み合い、また航海の途中に寂しさを嘆き思いを陳べ、また場所に即して詠んだ古い歌

新羅に遣はされし使人等、別れを悲しみて贈答し、また海路にて情を慟み思ひを陳べ、また所にあたりて誦する古歌

あなたが行く長い航海であなたが宿る港の宿に霧がたち込めたなら、あなたがいないことを嘆きつつ一人で待つ私の吐息だと気づいてください。

君が行く海辺の宿に霧立たば
吾が立ち嘆く息と知りませ

〈巻十五・三五八〇〉

前の歌へ
次の歌へ
語句解説
解説サイト
目次
非表示
朗読音声

中臣朝臣宅守と狭野茅上娘子と贈り答える歌

君が行く道の長手を繰り畳ね
焼き滅ぼさむ天の火もがも

〈巻十五・三七二四〉

中臣朝臣宅守と狭野茅上娘子との贈答歌

中臣朝臣宅守と狭野茅上娘子と贈り答える歌

あなたが流されて行く（流刑地に向かう）長い道をたぐり寄せたたんで、

君が行く道の長手を繰り畳ね
焼き滅ぼさむ天の火もがも

焼き尽くしてしまう天の火が欲しいものです。

〈巻十五・三七二四〉

前の歌へ
次の歌へ
朗読音声
非表示
目次
解説サイト
語句解説

中臣朝臣宅守と狭野茅上娘子と贈り答える歌

我妹子が形見の衣なかりせば
何物もてか命継がまし

〈巻十五・三七三三〉

中臣朝臣宅守と狭野茅上娘子との贈答歌

中臣朝臣宅守と狭野茅上娘子と贈り答える歌

妻が形見として持たせてくれたこの衣がなかったなら

我妹子が形見の衣なかりせば何物もてか命継がまし

何を支えに命をつないで（生きて）いけばよいだろう。

〈巻十五・三七三三〉

前の歌へ
次の歌へ
語句解説
解説サイト
目次
非表示
朗読音声

中臣朝臣宅守と狭野茅上娘子と贈り答える歌

帰りける人来たれりと言ひしかばほとほと死にき君かと思ひて

〈巻十五・三七七二〉

中臣朝臣宅守と狭野茅上娘子との贈答歌

中臣朝臣宅守と狭野茅上娘子と贈り答える歌

（恩赦で流刑地から）帰った人が来ていますと人が言ったので、

帰りける人来たれりと言ひしかばほとほと死にき君かと思ひて

うれしさのあまり死ぬ思いだったのに、あなたかと思って。

〈巻十五・三七七二〉

前の歌へ
次の歌へ
朗読音声
非表示
目次
解説サイト
語句解説

天平勝宝二年三月一日の暮、春の苑の桃李の花を眺て作れる歌

春の苑紅にほふ桃の花
下照る道に出で立つをとめ

〈巻十九・四一三九〉

天平勝宝二年三月一日の夕方、春の園の桃の花を見て作った歌

天平勝宝二年三月一日の暮、春の苑の桃李の花を眺て作れる歌

春の園に紅色に美しく咲いている桃の花、

花の色が美しく照り輝く下道に立っている可憐な少女。

春の苑紅にほふ桃の花
下照る道に出で立つをとめ

〈巻十九・四一三九〉

前の歌へ
次の歌へ
朗読音声
非表示
目次
解説サイト
語句解説

駿河の国、丈部稲麿の作れる歌

父母が頭掻き撫で幸くあれて
言ひし言葉ぜ忘れかねつる

〈巻二十・四三四六〉

駿河の国、丈部稲麿の作った歌

駿河の国、丈部稲麿の作れる歌

（防人として出発する日の朝）父と母が私の頭を何度も掻き撫で、「どうか無事でいますように」と言ってくれたあの言葉が忘れられない。

父母が頭掻き撫で幸くあれて言ひし言葉ぜ忘れかねつる

〈巻二十・四三四六〉

前の歌へ
次の歌へ
語句解説
解説サイト
目次
非表示
朗読音声

信濃の国、他田舎人大島の作れる歌

唐衣裾に取りつき泣く子らを置きてぞ来ぬや母なしにして

〈巻二十・四四〇一〉

信濃の国、他田舎人大島の作った歌

信濃の国、他田舎人大島の作れる歌

私の唐ふうの衣の裾にすがりついて泣く子供達を

唐衣裾に取りつき泣く子ら

置いてきてしまったなあ、

を置きてぞ来ぬや母なしにして

母親もいないのに。

〈巻二十・四四〇二〉

前の歌へ

次の歌へ

語句解説　解説サイト　目次　非表示　朗読音声

三年春正月一日、因幡の国の庁にて、饗を国郡司等に賜へる宴の歌

新しき年の初めの初春の
今日降る雪のいや重け吉事

〈巻二十・四五一六〉

大伴家持が天平三年春正月一日に、因幡の国の庁舎で、ごちそうを国や郡の役人達にもてなした酒宴の歌

三年春正月一日、因幡の国の庁にて、饗を国郡司等に賜へる宴の歌

新しい年の初めの初春の、

今日のよき日に降る雪のように、いよいよ重なれめでたき吉事よ。

新しき年の初めの初春の
今日降る雪のいや重け吉事

〈巻二十・四五一六〉

前の歌へ

当社について（コピーライト表示・お問い合わせ）

電子書籍 万葉集

制作・デジタル編集 : 有限会社 DCP

〒 733-0013 広島市西区横川新町 6-6-1906

(C) 2019 DCP Corporation. All Right Reserved.

お問い合わせ　　目次